
夢魅堂

空野妃紫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢魅堂

【Zコード】

Z5314E

【作者名】

空野妃紫

【あらすじ】

夢を売り買いする夢魅堂。思い通りの夢を見せてくれたり、大切な人と夢を共有したり。さて、今夜のお客さんは。

黄色い光りをゆるやかにうけて大樹はざわざわと枝をゆらしている。足をかたほつ湖につけてそこから穢れない清涼な水をすいあげる。光りも水も空気でさえ完璧なほど正常なその世界で大樹はさけびつづけていた。

「ここからだして」

願いよりも祈りにちかい気持ちでざわざわと腕をゆらしている。「声が聞こえているなら」

大樹は自分をここからだして貰うものをまつていた。あきらめることもなく、未来を信じて。

信じていたら思はずあせっていた。はやくしないとおくれになってしまいそれはなにがなんでも阻止しなければならない。（私にのこされているのはこれだけ）

大樹には祈るように言葉をつたえることしかのこされていない。希望の光りをかすかにつかむように大樹は声をとどけようと必死だつた。

この閉ざされた世界のなかで大樹はいま自分にできることをする。希望を信じてこのさきに自分の望む未来を見るために。

「はやく、私の声に気づいて・・・」

高層ビルが建ちならび人々がいきかう日本の都市、東京。東京のどこかに小さなお店がある。

その店の売り物は夢。怖い夢、楽しい夢、優しい夢、多種多様の夢をあつかつております。もちろん、正夢もあつかつている。店の名は『夢魅堂』。

「・・・お客様だ」

もと夢魅堂の店主はだれに言つこともなくつぶやいた。

「ああ、極上のお客だ。あのかたはどんな夢がご所望なのだらう」

店主は極上の客に満足する。

「はやくいっておやり。お客をまたせてはわるい」

元店主の男は言った。店主はそこではじめて現在の店主に顔をむけた。

アンティークな内装の店内で現在の店主は依頼者の声を聞き依頼者のもとへいく。もと店主の男は店主のさつた椅子を見つめて顔につすりとしわをきざんでふたたび目を閉じた。

緑が広がる大地。そこが見えるほど澄んだ水は光りの反射で美しく輝いている。穏やかな胎内のような優しい光りがふりそそいでいた。

「よかつた」

人々が忘れさつてしまつた場所に店主はたつていた。店主は両腕を広げている大きな大きな大樹に丁寧にお辞儀をする。

「夢魅堂、店主でございます。どのような夢をご所望ですか」

店主の優しい声と事務的な言葉に大樹はほころぶ。雄大でうつくしい大樹は目を見張るばかりだが、よく見るとところどころ鮮やかな緑は乾き、足もとには茶色くカサカサとした彼女の一部が散らばつていた。

「よかつた。もうあなたにしか頼れなくて」

大樹はほつとしたように店主に言いい言葉を少し切つてから店主に依頼をつげた。

「地球の夢のなかに私をつれていってくれませんか？」

鉛筆画か水彩画で描いたような穏やかで優しい姿の大樹は言った。でも、どこかあせつてているように店主には見えて。

「それは大仕事だ。お代が少々かかってしまいますよ」

店主は愛想笑いをしながらつげる。店主の言葉に大樹は緑の葉を一枚おとした。店主はその葉をうけとると大切にハンカチにつつんでしまいこんだ。

店主はその高価な葉に満足し依頼者に微笑みかけた。

「まずはそれだけ・・・」

大樹は店主が葉を胸のポケットにしまいこむのを見ると言った。
そして、店主の言葉をまつ。

「うけたまわりました」

生命そのもののような美しい葉に満足した店主はどこからか不思議な色の粉をとりだし大樹に吹きかけた。粉は大樹のまわりを舞いキラキラと輝いて美しい夢へと誘う。

「よい夢を・・・」

大樹は深い眠りのなかへ落ちていく。もう大樹には店主の言葉もはつきりとは届いてはいなかつた。

大樹は目を覚ます。緑を抱えていた両腕は人のものとおなじ形をしている。大地に根をはやしていた足も一本にわかれ人とまったくおなじものになつていた。人間の女の子とおなじ姿になつていた。その姿をキラキラとゆれる水面で確認するとまわりを見わたす。優しくふりそそぐ陽の光り。生き生きとした緑の大地。清々しい水の流れる音と深く広がる蒼い海。はるか昔の地球の姿があつた。

「アース・・・」

地球の夢のなかには動物、鳥、魚に昆虫が傷つけあうこともなく存在していた。この星の生物でゆいいつ存在していなのは人間だけだつた。まるでその生命がはじめから存在していなかつたかのように。

大樹は歩きだす。はるか昔の地上の姿に懐かしさと寂しさを覚えながら歩く。

はるか昔この星には岩と二酸化炭素におおわれた大気しかなかつた。アースはながいときを一人ですごした。ある日、生命が生まれそれは酸素を生みだした。酸素をえたことで地球はひとりぼっちではなくなつた。たくさんの命にかこまれてときをすゞすことになった。人もまたさんの生命のひとつだつたのにこの世界には存在していない。存在を否定するようにそのかけらすら見ることができなかつた。

「ここは」

奥へ奥へすすんできた大樹の目のまえに豊かな縁を抱えて優しく雄大にたつて いる大きな木があつた。

「わたし・・・」

その木は大樹そのものだつた。大樹はそつと木にちがづく。木の幹のあいだに身をまるめて眠つて いる男の子の姿があつた。

「アース」

大樹はこの夢の持ち主にそつと手をのばす。ふれるかふれないかの距離でアースが目を覚ました。

「リーフ？」

しばらくの沈黙のあとアースは大樹の名を呼んだ。リーフはそつとアースの頬にふれる。アースは懐かしそうに目をとじた。

「夢みたいだ。きみを見ることができるなんて・・・」

私たちはいつも二人でいた。しかしもう、半世紀も会つてはいない。二人が会わなくなつた理由は人間たちがおこしてしまつた歪みが原因だつた。

「アース・・・」

いたわるよう にでも切ない声でリーフはアースの名を呼んだ。アースは名前を呼ばれたことがうれしいのかにっこりと笑つた。

「リーフ、まつていてこの夢のように必ずとりもどすから」

アースの言葉に胸が苦しくなつた。リーフが望んで いることはそんなことではない。

「アース、どうして地震や津波をおこすの？」

答えがわかつて いることをリーフはとう。

「きまつて いるだろ う。君を傷つけるものを駆除して いるのさ」あたりまえのよう にアースは言つた。

人が犯してしまつた過ち。大地を汚した、大気を汚した、水を汚した、むやみに生命を奪つてしまつた。そして、それをアースは許さなかつた。

「アース、人間もまた私たちが育んできたのよ」

リーフはアースに言った。他の生命どうようと人間も私たちが育んできたのだ。

「生命のために酸素を生みだしたきみにやつらは傷つけることばかりする」

アースは拗ねたように言い、リーフの手をにぎりしめた。

「でも、それでもあんなことはやめて。それに、悪いことをしたからって消してしまって悲しすぎるわ」

リーフは傷ついた瞳でうつたえる。アースに自分の思いが届くようだ。

「いまさら一種くらいへらしても大丈夫だよ。それに対してもこの数百年で何種の生命を絶滅させたかわからない」

たしかに人間たちは自分たちの欲にかられて多種多様の生命を絶滅においやつてしまつた。なにも言えずにいるリーフにアースは笑いかけて言った。

「リーフきみは優しいから、なんでも許してしまうんだね。僕はゆるしたりしない。きみまで傷つけてのうと生きているやつらを・・・きみも彼らがやつたことを思いだせばきっと僕の考えに賛成してくれるよ」

人間がしてきたことを忘れてしまつたわけではない。でも。

大気が動いて風が吹く。思わず目をつぶつたリーフにアースは言葉をのこした。

「きみがいなくなつたらだれも生きていけないよ」

アースの言葉にリーフは心のなかで反論しつづけた。それはちがうと。過ちを犯してしまつたからといって消してしまるのはちがうと。なんどもなんどもアースに叫びつづけた。いつか聞いてくれると信じて。

（アース、もう生命は私の手を借りなくとも生きていけるようになつたわ）

リーフが目を開けるとそこはさつきまでたつていた場所とはちが

つていた。さつきまでの優しい空気がつつんでいる世界とは。

リーフがたつていたところは縁と水と生命があふれていた世界とはちがっていた。切り倒された木々たち。焼きはらわれていく縁の芝生たちは生命あふれる縁の姿をうばわれ悲しい墨色に染まつていった。

「私は切りとられても焼きはらわれても再生していけるからいいと思つていた」

きられたところから新しい芽をだし、数十年かけてもとにもどつていく木々。焼きはらわれても大地に新しい芽をのばして一年もしないうちにもどつていく縁の台地。しかし、人間の破壊行為は激しく再生の時間を許さなかつた。

「アース、それでも、私は生きていくために彼らに必要ならとわけあたえてきたわ」

どこかで聞いているかもしれないアースに呼びかけるように言つた。

人間は木を切りそれを家や紙などの材料としてつかう。大地を焼きそこに烟をつくり、自分たちの食べるものをつくりだす。

焼きはらわれつづけた大地は養分を失い不毛の大地とかし生命の存在を拒否してしまつた。大地が許すまで生命を拒否しつづけるだろう。

「リーフ、きみのその思いは人間にはどどいていないんだよ。だから、きみたちがあげた悲鳴にも気づかないであんなひどいことをつづけてきたんだ」

アースの声だけが聞こえる。

伐採された木たちは大地をささえることができなくなり少しの雨でも土をこぼして倒れていくよつになつた。

「リーフ、見てごらん。きみたちの存在がなくなつた大地を」縁が減るにつれ居場所をうしない数を減らしていく生命たち。そして、やがて砂漠の大地に生命の亡骸が広がつていく。

「アース」

悲しいリーフの声にアースがあらわれる。アースは慰めるようにリーフをつつみこむと言った。

「きみだつてあいつらのせいで失つていく命を見て泣いていたじゃないか」

そして、アースはつづける。リーフはアースの言葉に涙がでそうになるのをこらえた。

「きみが僕と生命をつなげてきたんだ。はるか昔から生命が大地にたつその前から、ずっと、ずっと……」

アースの言うとおりむやみに失われていく命に私はずっと傷ついてきた。傷つきながらそれでも人間を信じてきたのだ。

（いつかつぐなうときがくると……）

「でも、でも」

（ときが許すかぎり信じたい）

反論しようと言葉をつむぐとする。しかし、どうやってアースに伝えればいいのかわからない。伝たい思いをどうすればアースにわかつてもらえるのか。

「きみがいるから、僕だつて生命にあたえることができた」

アースは満ちたりた声で言った。

「見てごらん。きみだけじゃない。やつらは大気を汚染し、水を汚染しそれでもたりないのか土壤まで汚染している」

アースは空を見あげる。アースの見あげたさきには真っ赤にもある太陽があつた。

「きみが生命たちのためにつくったバリアーはもうほとんど壊されている」

生命にとつて紫外線は有害なものだった。それを酸素がオゾンと変化してさえぎってきたのだ。

「人間だつて生きることに懸命だわ」

リーフはアースにうつたえる。どんな生命も自分の命を保つことには貪欲になる。

「そうだね。生命はみなそれを基準に動くから。でも、人間たちは

求めるばかりであたえることをしないよ」

アースは忘れてしまったのだろうか。人間たちも私たちと共存していたときがあつたことを。

「人間たちだつて私たちと共存してきたときがあつたわ。それに、なにもないところから私たちはつくりあげてきたじゃない」

リーフの言葉にバカにしたようにアースは言つた。リーフの言葉をバカにしたんじやなく人間をバカにするように。

「じゃあ失くしたんだ」

長いときをすごしてきた。ときは「こくこく」と変化しておなじように自然や環境も変化していった。そんななかでもかわらないものがある。

「人間はいま見失つているだけ」

リーフの言葉にアースはイラだつたように言つた。

「もういいつ。それじゃあ、すべてをけしていちから僕ときみでもういちどつくりなおそつか?」

アースの言葉に傷ついた瞳の色を見せるリーフにアースは表情をやさしくやわらげる。そしてアースはリーフの臉を掌で隠すと言つた。

「リーフ、きみは優しいから。僕が全部かたづけてあげる。きみが悲しまなくていいように眠つていいるあいだにね」

リーフの言葉を聞きながらリーフの意識が遠のいてしまう。夢のなかのそのまた夢のなかへ落とされていく。底のない広い世界へおとされていく感じに逆らえずリーフは沈んでいった。

リーフがいる世界は生命が知恵という果実を手にするまえの世界だつた。彼らは本能的で即物的だけど世界の輪をよく理解していた。なにかを得てはなにかをささげること。これが世界の真理だつた。他の命を奪つて生きていく。しかし、その身が滅びれば土にかえり他の生命のかてになる。そんな輪がぐるぐるとまわつて世界は安定していた。

(おだやか)

心地よくまわる輪のなかは不安もない。求めではあたえ、あたえては求める。生命は自由でそして、果す義務を果していく。

(やさしい太陽)

緑の葉を生き生きと照らしているのは太陽だつた。葉は木陰をつくりそのしたにはたくさんの動物たちがくつろいでいる。肉食獣も草食動物もおなじようにくつろいでいる。自分の生命が維持できていれば無駄な争いはしない。生き物たちの暗黙の了解だつた。

「アース」

必ずとなりにいたアースをリーフは呼んだ。幸せも悲しみもともにわけあたってきたアース。

「リーフ。こんな世界がずっとつづくよ」

アースの言葉につなぎながらリーフはこのままじゃいけないような気がした。どうしていけないのかわからないけど。

「僕が守つてあげるからね」

アースは優しく言つた。世界は完全で間違いはないにもようつて思えるのにしなければならないことがあつたよつな気がして気持ちが安定しない。

「アース、私なにか忘れてこる気がする」

アースはおかしそうに笑うと安心させるように言つた。

「リーフが気にすることじやないよ」

(やうなかなあ)

リーフは小さな小さな疑問を残しながらアースの顔を見る。アースは優しい目でリーフを見つめている。なにも心配ないと語りかけてくるような顔をしていた。

夢魅堂の店のなか。店主は揺れている大地を感じながら、椅子に座っている。その椅子は細かな細工と上品な木の色をしていて椅子にはられた布も木の味わいをよくうつしだしている。店主のはじめ

ての仕事の代金としてもらつたその椅子はいまでも店主のお気に入りの一品だ。

揺れはだんだんと大きくなつてきていて、外では不安のかくしきれない人々のざわつきが聞こえてきてめざわりだつた。

「やれやれ、正夢を」所望されればこんな面倒にならずにおすみになるのに」

依頼者が夢のなかの夢にいることをしりながら店主は言つた。

店主みずから手をだすことは禁じられている。支払い以上のことは基本的にしないのが遙か昔からの店の決まりだ。

「地球全体がゆれている」

鏡にうつる世界を見ながら店主は言つた。大地が揺れれば波がたち津波を誘発する。人がどれだけ科学という力をもち進化していつたとしても自然に拒まればおわりだ。それを失念してしまつている。

鏡のなかには人間以外の動物の姿はない。彼らは自然に守られた。だから逃げて安全な地へ逃れていく。

「現に拒まれているがね」

元店主の男が言葉をもらした。

「人の思考を読まないでください」

店主は少し気がわるそうに言つた。しかし、もと店主はそんなことを気にすることもなく店主に言つた。

「営業にいくべきなさい。このままじゃあ、依頼者がきのどくだ」

その言葉に溜め息とともに店主は立ちあがると依頼者のもとへといつた。店主がさつた椅子を見つめてもと店主は深く息をはくと心配そうにその椅子をみつめた。

依頼者は深い深い夢のなかにいて眠つていて。なにもかも忘れて夢のなかに身を落としているその顔はとても安らかでこのままにしておいてもいいのではないかと思わせるほどだつた。

店主は彼女の夢にはいるためそつと彼女の額にふれる。すつと彼

女の夢のなかにはいつていつた。

「きれいなところですね」

夢のなかにはいつた店主はつぶやいた。こまはもつほとんじ失われた美しさがそこにあつた。

「邪魔をしにきたの？夢屋さん」

男の子があらわれて言った。店主は男の子を見つめたまま言つた。

「営業ですよ。アース様」

アースはその言葉を聞くと笑いながら言つた。

「じゃあ、僕が依頼主になつてやるよ」

ほつと興味深げな瞳で店主はアースを見て聞いた。彼が必要とする夢に少しばかり好奇心を刺激されたのだ。

「どんな夢をご所望で」

アースはあどけなく笑つて言つた。それはまるで子供がサンタにプレゼントをねだるよつに。

「人間が全部きえる正夢をひとつもらおうかな」

店主は表情を曇らすことなく言つた。

「その代償は大きいですよ」

「なにがほしいの？」

店主の言葉にアースは答える。

「大地を揺らしてばかりじゃ、なかなか思つよつてひとせはかぢらなくて、困つてゐるんだ」

アースの言葉に店主は言つた。なんともなことのよつて眞然のことだとも言つようなどだった。

「では、リーフ様をいただきましょつ」

店主の言葉にアースの表情が険しいものへとかわる。信じられないことを聞いて驚きよりも怒りが先行した。

「なんだつて？」

そんな険しいアースのよつすにも店主は平然とした顔で言つた。なかにおかしいことでも言つましたかと言つよつた表情で。

「正夢は当店でもつとも高価な品でござります。最高の品には最高

の支払いでなくては」

アースは店主の言葉に小憎たらしい顔をむけると呟く。

「まあ、いい。邪魔さえしなければそれで」

「交渉決裂ですね」

店主は残念なようすも見せずそのままアースを見たまま。アースは店主がきた場所を見たまま。

「夢屋か。変なやつ」

アースはそう呟つとリーフの夢からでていった。リーフはまつとこのままことがおわるまで眠りつづける。

おきた時に彼女が悲しむなら夢屋にたのんで夢のなかにその悲しみを閉じこめてもいい。そんなことも考えながらアースは高鳴る気持ちをとまられない。

人間を排除してきれいになつたらリーフをおこそう。そんな楽しいことを考へるとアースの心はワクワクと高鳴った。

アースとはなれてからだいぶんと夢のなかをさ迷つてている。夢屋なのだから得意分野なのだがなかなかものだつた。

「しかし、複雑に隠されていますね」

依頼者を見つけられずにいる店主はぼやいた。彼女のいろんな夢を渡りながら彼女の姿を探す。いつもならなんのことないことが多い。

一匹の縁のきれいな鳥が店主の頭にとまつた。鳥は店主の頭をつんつんと軽くつついでくる。

「痛いですよ」

べつにそんなに痛くはないのだが店主はさつまつて頭の上の鳥を捕まえようと手をのばす。

鳥はつかまらないように飛び立つと店主のまわりをクルクル飛びまわつて、それからどこかへ飛びさつてしまつた。

「しかたないです」

店主は鳥を追いかけていった。鳥を追いかけてくつもの夢をすぎ

ていく。すきていく夢にはリーフとアースのときを閉じこめていた。夢のおくのおく。無意識で見る夢のときにまでいく。店主は依頼者を見つけた。そして、体を軽くもちあげると声をかけた。

「おきてください」

眠る彼女に店主は言った。横たわっている依頼者はうつすりと目を開くと戸惑った瞳を泳がせる。

「ここはあなたの深い夢のなかです」

店主は依頼者がなにかを言うまえに言った。

「ご依頼承りに参りました。どんな夢をいじ所望でしょうか?」

店主の言葉にはつとしてリーフは立ち上がる。

「アースをとめないと」

店主はリーフの手をひきよせて依頼者を抱き寄せるとせりあがるように飛びあがった。

「夢からでましょ。依頼はそれからお聞きしますか?」

深い夢の底から上へ上へあがつていいく。夢の出口をもとめて進んでいくと明かりが見えた。あまりの明るさに目をつぶりそつになつた依頼者に店主は言った。

「目をつぶらないで」

リーフはまぶしそうに手をかざしながらも目を開いて光りのなかにはいつていいく。

光りのなかからぐるといじんまりとした部屋のなかだつた。

「ここは?」

リーフの呟きに店主は言った。

「わたくしの店です」

そのとき大地が揺れた。大きな揺れに店主もリーフもおもわず態勢を崩す。

「アースをとめないと」

リーフはそう言つてじいかへいといつとする。その手を店主はつかんでひきとめた。

「まちなさい」

「でもっ」

切羽つまつた顔でリーフは言い店主を見る。

「正夢をお買いになられればすぐにおたまります」

店主は正夢を買うことをリーフにすすめる。

「正夢でアース様があなたの思いを理解なされるように願えればよろしいでしょ？」

リーフはゆっくりと首をふってそれを断わった。そんなことで他のものの気持ちを思うようにはしたくはなかった。

「それじゃあ、意味がないわ。無理やりじやなくほんとうに理解してほしいの」

そう言つてリーフは手を振りほどいた。店主はふたたび手をつかむとリーフに言つ。

「アース様の夢にいきましょう」

「でも、アースは目覚めて」

店主は笑顔をつくるとリーフに言つた。彼女がどこまでやれるのか見てみたい。

「寝てみるだけが夢ではありますんよ」

いつのまにか椅子に座つていた老人はアースにそう言つと深いしわを刻んでゆるやかに笑つた。

「そうです。さあ、いそぎましょう」

そう言つて店主はリーフをつれて夢のなかへきえていく。

アースは満足げに人々が地震に恐怖している姿を見ていた。次の地震が最大級のものになる。他の生命はもう逃げていっていない。そういうターゲットである人間だけがのこつてているのだ。

「無駄にふえるから逃げ場もないんだ」

小さな子供のような無邪気な声でアースは言つた。

余震の影響で津波が各海岸でおきている。あつという間に海にのみこまれていく人もいる。地震のもつとも便利なところは一次災害である。消し忘れの火元が原因の火災。その火災がまたガス爆発な

どを誘引する。海は大きな波をつれてきて人や人が築いてきたものをのみこむ。

(これほど便利なものはないね)

アースはそう思つと最後の大地震を起しそうとした。そのとき急に意識がうばわれた。

そのままどこかへひきずられていく。目を開いたらその場所はアースの夢のなかだつた。その夢は見る夢ではなく叶えたい夢のなか。思わずアースは現実と夢の区別をうしなう。

「リーフ」

アースの夢のなかにリーフがいた。リーフの横にはあの夢屋がいる。夢屋がいたことでなんとなくこれは夢なんだとアースはくべつすることができた。

「アース、これ以上はなにもさせない」

リーフの言葉にアースは無邪気に笑うと夢から覚めようとする。ここはアースの夢のなかだから覚めることは容易なことだ。

「まだ、つきあつてもらいますよ」

店主はそう言うと夢の入口を閉じてしまつた。これでアースは自由に夢からでられなくなつてしまつた。

「どういうつもりだ」

イラついた目でアースは店主に言つた。いまにも噛みつきそうなアースのようすにリーフはあわてて言つた。

「私が依頼したのよ」

リーフの言葉に忌々しそうに視線をそらしたアースはリーフに言つ。

「どうしてここまで邪魔するの」

子供が母親にすがるようなアースにリーフは思いをこめて言つ。

「人間たちは気づきはじめているわ。だから」

「もう少しまつて」と言おうとしたリーフの言葉をアースがさらつていく。

「いまさらまてないよ。君も他の生命たちもかなり弱つていてるだろ。だいいちどうして僕が用意した場所にいないの?」

たしかに弱っていた。だからアースは私を正常な世界に閉じこめたのだ。なにを犠牲にしてもアースはリーフをその世界に閉じこめた。

「私はそんなこと望んでないわ」

そしてリーフはその世界からでてアースをとめるために夢魅堂に依頼したのだ。手助けをしてもらいたくて。

「でも気づきはじめてるのよ。あと少しで昔のように共存していけるわ。共存さえできるようになれば私も環境も治つていくことができる」

リーフの言葉にアースは悲しそうな瞳で言った。そんなこと可能ではないと否定の色を強く秘めた瞳だ。

「無理だよ。僕はリーフにいつまでもそばにいてほしいんだ」自分の限界がちかいことがわかつてingリーフは安易に「大丈夫」と言えないことにはがゆさえ覚えてしまつ。うわべだけの言葉をアースにつかいたくなかった。

「それでも・・・」

小さな声でリーフは言つたがアースにはとどいていないだらう。しかし、店主にはその声が聞こえた。

「リーフ様が危なくおなりになつたときに正夢をお買いになればよろしいのではないでしょうか？」

おし問答をくりかえしている一人に店主は提案した。しかし、アースは納得していない。

「人間のためにこれ以上たくさんのお代償をはらうのか」

アースの言葉に店主は冷静なまなざしで告げる。

「人間のためではありません。リーフ様のためです」

アースはいぶかしがりながらつぶやく。店主の意図がつかめない。「リーフのため」

店主は「そうです」とつぶやくと言葉をたしてしていく。

「このままではリーフ様がお悲しみになる。せめて五〇年でもお待ちになられてからのはうが納得もいくでしょ、おたがいに」

アースはリーフを見る。リーフの静うような瞳を見つめて逃げる
ように背をむけた。そのままきえてしまつた。

（なにを考えているのかわからぬやつ）

アースはそう思いながらリーフから逃げるようにきえていった。
リーフをあの世界に閉じこめたときとおなじ気持ちがする。
リーフを悲しませることの恐怖に怯えてリーフのそばにいられなくなつた。間違つたことをしているとは思わないがリーフが傷つけてしまつことに罪悪感をおぼえた。

いなくなつてしまつたアースにリーフは悲しそうにアースの名を呼んだ。

「大丈夫ですよ。夢からでることはできませんから。とりあえずい
ちじ休戦です」

店主は肩を落としてしまつていてるリーフに励ますように言った。

「そうですね。まだまだ時間ありますよね」

がんばって精一杯の笑顔をむけるとリーフは「がんばるぞ」と体をのばした。痛々しい感じのするその背を店主は見つめる。

そのころアースは考えていた。人間があやまちを犯しはじめたころ地震をおこしそのあやまちを罰しようとした。そんなアースにリーフは言つたのだ。

「アースもうすこしようすを見てあげて」

リーフは優しい目で言つたのだ。

「まだ、なにもわかつていいだけだから、気づいたらきっともどどおりになるように努力すると思うの」

リーフの言葉にアースは不安を覚えた。そこしれぬ不安が心にうずまいた。リーフを失つてしまつようなそんな冷たい不安。リーフは自分がいなくなることをなんとも思わないだらう。自分よりも自分以外に尽くしてしまうから。

（リーフ、きみがいなくなつてしまつたら僕は・・・）

リーフがうまれるまでアースは一人だつた。リーフが生まれる前

に命はいくつか誕生した。けれども会話なんてできなかつた。はじめて自分以外の声を聞いたときの思いは忘れない。

「私に名前をちょうだい」

はじめて話しかけられた。はじめて笑いかけられた。やわらかくてあたたかなその笑顔にアースははじめて喜びと孤独をしつた。孤独なんて感じていないと思つていたのに。

「リーフ」

アースは『リーフ』と名づけた。名前をもらつたリーフはそれはそれはうれしそうに言つたのだ。

「ありがと」

最初はこの言葉は名前をつけてもらつたことへのお礼だと思つた。でも、

「一人にしないでくれてありがと」。これからはずつといつしょだよ

リーフはそう言つた。「ずっとといつしょだよ」その言葉に自分がどれほど寂しい思いをしてきたかしつた。はじめて氣づいて、リーフが隣りにいることにほつとした。そしてこんなことも言つていた。

「一日のなかでいちばん夜が好き」

アースは夜が嫌いだつた。嫌いだとわかつたのはリーフがつままれてきてくれたあとだつたけど。

「どうして？」

あんな暗くて寂しい世界を好きだと言つたリーフの気持ちがしりたくてアースは聞いてみた。すると彼女はいとおしそうにそして優しい顔で僕に言つたのだ。

「だつて、こんなに暗いなかにもあんなに光りがあるんですね」そう言つて夜空に月をつついて両手を広げ星と月を抱きしめているようだつた。

「どんなに苦しいことがあっても光りがひとつでもあればがんばれるわ」

そんなリーフの姿が夜なのに太陽のようにまぶしくて目をほそめて見ていたことをいまだに鮮明に覚えている。

（どんなに暗くても希望の光りはかならずある。リーフはやうやくつて夜の暗さも星や月の精一杯の光りも愛していた）

アースにとつて嫌いだった夜はリーフがとなりにいてくれることで少し好きになれるようなきがした。あくまでもリーフがそばにいてくれないといけないけど。

優しいリーフに心ごと救われたのだ。このときからリーフがそばにいな世界を描けなくなつた。

（さんざん長い間一人でいたのに・・・）

たくさん感情をくれたリーフとの日々を思いながらアースは思う。

「生まれたときからきみは優しかつた」

リーフはずつとずつと優しかつた。きつとこの先もずつとずつとかわりはしないだろう。リーフがあまりにも優しいから傷つけたくないアースはあのときリーフの意見を尊重したのだ。

「でも、もう・・・」

（限界だよ。リーフ）

リーフが弱りつつある。リーフがもしものときのために新しい生命の準備をしていることに気づいてしまつた。

「だからきみを閉じこめたのに・・・」

だからリーフをあの正常なものをかためてつくつた世界に閉じこめてリーフがよわつていふことを少しでもくじとめようとした。リーフは信じているのだ人間があやまちに気づいたときその罪をつぐなうと。そのときに自分がいなくなつたときのためにあたらしい命をのこしてまでも。

「リーフがいなくなるぐらいなら・・・」

自分に言い聞かせるようにアースは言った。
(そのことにくらべたらなんのこともない)

リーフを閉じこめたあと、すぐには人間に手をださなかつた。イ

ライラしながら人間のようすを見つづけていた。彼らが改心すると信じて。

しかし、彼らは改心どころかひどくなるばかりで。リーフがいなくなるくらいならきっと悲しんでいるリーフを見て、いるほうがましだと自分を奮い立たせながらアースは動きはじめた。

店主の言葉にやる気をとりもどした。リーフはアースをさがしにいじりとした。しかし、店主に止められる。

「まつてください」

店主の言葉にリーフは店主のもとへもどる。

「なにがありました？」

リーフの言葉に「いえ」と店主は答えるとお茶セットをだしてのんびりとイスにすわった。店にあるのとおなじようアンティークな品物だ。

「お茶にしましょう?」これをつめてもいいことはありませんよ」

店主の意図がつかめないリーフはどづしていいのかわからず。「あの」とか「でも」とか言っている。

「考える時間が必要ですよ。あなたもあちらも」

そう言つて店主はお茶の準備をする。リーフはとりあえず腰をおろした。

「紅茶でよろしいですか?」

リーフは戸惑いながら「はい」と言つと店主をよく見つめる。かわつた人だとと思うが思慮深そうな感じも受ける。

「あのう。アースをさがさないでいいんですか?」

店主はカップをさしだすとなんともないよつて言つた。

「かまいません。少し考える時間があたえることも大事ですよ。それよりこれからどうしますか?」

店主の言葉にリーフはだまつてしまつ。たしかにこのまま押し問答をつづけていてもただ無駄に時間がすぎていくだけ。なにひとつアースに伝えることはできない。

「リーフ様の願いをアース様にお見せになられてはいかがですか？」
だまつてうつむいてしまつたリーフに店主が提案した。

「見せる？」

リーフは意味がわからずに言葉をくりかえした。

「そうです。言葉だけではなかなかたえきれないのなら、あなたの描いている未来をアース様にお見せになればいい。それなら足りない言葉をおきなつてくれるのではないかですか？」

店主はにこやかに言つた。リーフはその提案に表情を明るいものへ変化させしていく。

「いいです。それ！ やりましょ！」

「きよよく言つたリーフに店主は事務的に告げる。

「リーフ様の夢のお買い上げは一つ。アース様を夢のなかにとじこめたことはこちらが勝手にさせていだいたことですしサービスにさせていただきますが・・・」

指を一本たてながら説明をした店主にリーフは不安になる。三三田の夢を支払うだけのものが自分にないのかと。

「私はもう三三田の夢を買うことができないんですか？」

リーフは恐る恐る店主に聞く。店主は愛想笑いをうかべながら説明する。

「いいえ。ですが三三田の夢を購入なさいますともしものときのために正夢がつかえなくなってしまいます」

どうします？ といつよつと店主の田を見つめてリーフは迷わず言った。

「さつきも言いましたが正夢を買う気はすこしもないんです。言いなりになつてほしいんじゃなくわかつてもらいたいだけだから」「迷いのないまつすぐとした瞳が語りながら穏やかに優しくなつていくことに店主は好ましいとおもつた。

「いいでしょ。そのかわりあなたの宝物をひとついただきます。よろしいですか？」

店主もつらつらと穏やかに笑つてしまつた。

「ええ。これがおわつたらとどけますね」

リーフは店主にそう言つとほんわかと微笑む。カップを手にもつて言つたリーフの姿に店主は思つた。

（こんな優しくて純粋な少女のようなひとが人間を守るうつしているなんて）

少女のような可愛らしさとどこまでも包みこもうとするあたたかさ。そんなリーフが苦しむ姿も悲しむ姿も見たくないというアースの思いがわかつたようなきがした。

（このかたはなにを犠牲にしても守つてさしあげたくなる）

アースも抱いているだらうおなじ思いを店主も思わずにはいられなかつた。

アースはあせつていた。出口が見つからないのだ。あとは大地震をおこすだけなのだ。警告ではない排除するための災害。遙か昔の人々は地震や日照りがおきると天災だといって恐れたがいまはちがう。

完全に人々は我々のことを忘れさつてしまつた。そして、はゞめがきかなくなつた彼らは動物を植物を自然を傷つけることしかしなくなつた。

「くそつ、あの夢屋めつ」

あせつてゐるのかアースらしくもなく言葉が荒い。

半世紀前に見たときよりも一時間前に見たときよりも刻々とリーフが弱つていつているのがわかつた。

（リーフがいなくなる）

それが怖かつた。リーフがそばにいることそばで笑つていてそれがアースの願いだつた。だからたくさんの生命が傷つかないようには海を大地を大氣をもととのえていつた。そこで生きていけるようになつた。

（人間をけさないと）

皮肉なことにリーフが必死になつてかばつてゐる人間がリーフを

傷つけている。しかし、今でさえ環境を汚染してその結果リーフを傷つけていく。

「夢屋から出口を買うしか……」

つぶやいたアースの頭上を突然光りが爆発する。光りはアースをつつみこんで小さくなつた。

「なつ」

光りはアースをのみこんでしまつた。アースは目をさました。生き生きと枝を伸ばし深緑の葉をついている木々がたちならぶ。その横を不思議な形をした車が走つていた。その車からは有害な気体はでおらず排気口すらない。

建造物にはソーラーパネルが必ずついておりそれで電気を補つているようだつた。都市のなかを澄んだきれいな水が川をつくりそのなかには魚がおよいでいる。

建造物と緑との調和が保たれ。他の生命が生きていくための緑も水もあつた。アスファルトの禍々しさはなく緑によりそうようにな地があつた。

人間も他の生命も緑もすべてが適切な距離をもち共存しているそんな感じの世界だつた。

「ここは……」

ためらいがちにつぶやいたアースは自分が今どこにいるのか全くわからない。

人間がすむ町のはずなのにそこにはきちんとした自然の姿もあつた。アースはためらいながらも町のなかを見まわるように歩いていく。

町からはずれると森のなかにはいつていつた。そこにはまだまつな生命がいて自分たちの生活をおくつていてる。

アースは太陽を見あげた。太陽の光りは昔のように穏やかで優しく地上を照らしてた。ふとリーフのことが気になり探すよう走り出す。

（リーフは……）

」の世界がどこだかわからないがもし未来ならリーフがいなければ意味がない。アースは息をきらして走りつづける。

急にひろい広い場所にたどりつく。太い幹に大きな両手を広げ、緑と小鳥を抱いた大樹の姿があった。

「よかつた。リーフ」

アースは両手を伸ばして大樹の幹を抱きしめる。幹からはドクンドクンと鼓動がきこえ生きていることを証明した。

（・・・・）

鼓動が聞こえてくる事実に安心しましたその鼓動にも安心を覚える。

「アース」

不意に名前を呼ばれアースはいつのまにか閉じていた瞳を開ける。大樹から顔を覗かせている女の子がいた。

「リーフ。どうして」

アースは少し驚いた顔でつぶやく。そんなアースにリーフは優しい笑顔で微笑みアースの手をとった。

「アース、ここは私の夢のなかよ」

うれしそうにつぶやいたリーフにアースは言ひ。

「夢のなか？」

「そう、夢のなかなの。私が叶えたい夢のなか」

リーフは目を輝かせて言つた。

「アースは人間なんていなくなつたほうがいいって言つけど、私はそうは思わない。人間だつて必要よ」

リーフの言葉にアースはだまりこむ。

「こんな世界むりだよ」

悲しそうにアースは言つた。リーフがいまのようにな笑つてくれるなら叶えてあげたい。

「無理じゃないわ。いますぐには無理でもきっとちかい未来に叶うわ。だって、ようやく気づきはじめて自分たちのできることを考えはじめているもの」

悲しそうなアースにリーフは言つた。未来はここにつながつてい

るんだといつように希望をもつて。

「今すぐじゃないときみがきえてしまつ」

アースの深刻な目とあせつたよつた言葉にリーフ自信をもつた目で言つた。

「大丈夫。私は絶対にいなくなつたりしないから」

実際、人間たちは空氣を大地を汚さないよつにいろいろと考え出しそれを実行している。傷つけた傷口に薬をぬるうと必死になつてくっているのだ。

「でも氣づくのがおそすぎたよ」

納得できなよつたアースの言葉をリーフは言い聞かすようになつた。

「アースも急激な変化で多くの生命を困らせたわ。人間たちもおなじよ急激な進化のせいで少しだけ見落としだけ。それだけだわ」

アースは体の変化に対応できず急激に環境を変化させそのことでたくさんの生命を死に追いやつてしまつたことを思い出す。氷に閉ざされた世界とその世界のおわりのときである。

「でも、もう五〇年もまてない」

リーフの状態を考えると五〇年も待つてはいられなかつた。

「アースよく見て。人間のなかにも私たちを助けようどがんばつている人はいるわ。まだまだ小さな環だけ、一生けんめい薬をぬろうと必死になつてくれてる人もいるの。そんな人たちもいらないの？」

アースは目をつぶつた。傷つけるよつた行為のなかにもたしかにかすかでもその傷を治そつと必死になつている人の姿があつた。

それは国や企業などの大きなものから分別やボランティアによる小さな取り組みまでさまざまだつた。

(こままできづかなかつた)

「きつと五〇年もあればもつとたくさんの薬があつまつて私たちが

自力で治すよりももつともつとはやく治るわ」

希望に満ちたりーフの目にアースは思つた。

（この目だ。いつもこんな目で笑つてた）

久しく直視しなくなつたリーフのまなざしにアースは心が締めつけられる。いつも希望を明るい未来を思いながらリーフは笑つてアースのそばにいた。

（・・・僕が守りたかったのはこの笑顔なんだ）

「アース見て」

目をつぶつたままのアースにリーフは言った。

リーフの言葉にそつと瞼をあける。アースの目にひろがつたのはキラキラと輝く町の光りと大空に散りばめられた満天の星空だった。

「きれいですよ」

言葉もなくただその光りに目を奪われていたアースにリーフは言った。

星空がキラキラと輝いているのは大気が澄んでいて清らかな証拠だ。昔のよくなきれいな夜空と人間の営みの輝き。

（夜がこんなにきれいに輝くなんて・・・）

アースはそう思つと同時にこの夢をかなえてあげたいと思つた。私のいちばんの夢はこのきれいな夜をアースといつしょにお散歩することなの

夜の光りに瞳をあずけたまま言つたリーフの横顔をアースはみつめる。その顔はうれしそうでおなじくらにキラキラ輝いていた。（もし、僕が人間をけしたらこの笑顔もきえてしまうのかな）

アースは考える。きっとではなく必ずきえてしまう。リーフを守りたいけどこの笑顔を失つてはいけない。この笑顔」とリーフを守らないと意味がないのだから。

「リーフ、僕はきみを守りたいんだ。なによりも大切に守つてあげたい」

誓つようなアースの言葉にリーフはアースを見つめる。

「きみの願いは叶えてあげたいし、いつまでもそばで笑つていてほしい」

アースは自分の思いを言つた。このリーフの夢見る世界」と守つ

てあげたい。

「リーフがそうしたいというなら、五〇年まつてみるのもわるくな
い」

「苦しそうに言つたアースにリーフは声をかける。

「アース・・・」

アースはその言葉に励まされたのか言葉をつむぎだす。

「・・・でも、きみにもしものことがあつたら僕はどうすればいい
?」

心からのアースの叫びにリーフは気づいた。わかっていると思つ
ていたのに実はなにもわかつていなかつたことを思い知らされる。
(アースはずつとずつと怖かつたんだ)

リーフが生まれたとき世界にはアースしかいなかつた。新しい生
命が生まれるまで一人きりの世界でながいあいだいたのだ。

(リーフきみは特別なんだ)

アースは心のなかで何度もつぶやいた。リーフにもその思いは伝
わってきて大切にしてもらつている喜びとなんだかわからない苦し
さに涙が溢れた。

「アース、ごめんね」

リーフは自分がいなくなつてもアースはいつときは悲しむかもし
れないがきっとたちなおると思つていた。世界には命があふれてい
てもう一人きりの世界ではないから。

(でも、ちがうんだね)

「アース、ごめんね。自分のことばっかり考えて、もつともつとア
ースのこと考えてあげるべきだった」

思いがあふれるように涙があふれしていくリーフの瞳を見つめてア
ースは言つた。

「リーフ・・・」

アースは泣き止んでほしくてリーフの名前を呼んだ。

「アースを一人きりの寂しい世界においていくところだった
でも、リーフの涙はとまらなくてアースは手をのばした」

「もういいんだ。大丈夫だから、もう」

(泣きやんで)

そんな思いをこめてリーフを抱きしめる。泣いてほしいわけじゃなく笑つていてほしいんだ。

「・・・ありがとう」

アースの思いが伝わってきてリーフは涙を流すのをよけいに止められなくなつた。アースの優しい気持ちがふれあつたところから流れこんできとうれしくてたまらない。

「もう少ししだけまつてみることにするよ」

泣きやまないリーフにアースは言った。アースにはリーフがいればそれでいいけどリーフにはそうじやないから。欲張りな彼女はみんなといつしょに生きて生きたいと思うから。彼女がいなくならない範囲であるなら無理を見守つてあげたい。そんな無理をしているリーフ」と守つてあげよつとアースは思つ。

騒がしい夜が静まり物音しない朝の公園。ベンチのうえには酔つたままその場で眠つてしまつた若者の姿があつた。

若者はスキンヘッドに鼻や耳にピアスをジヤラジヤラとつけお世辞にもガラガいいとはいえない。環境にやさしくないタイプの人間である。

「へっくしゅんッ」

朝の寒さに目をさました若者はベンチから起きあがる。なにか夢を見ていた気がしたがまったく覚えていない。

「・・・・」

髪のない頭をかきむしりながら公園内を見わたすとおもむりに立ち上がり公園をさろうとする。

「かん？」

カンつと乾いた音をたてて蹴り飛ばされた缶はカラソ「ロロン」と静かな朝には似つかわしくない音をたてて転がつていく。

転がつていつた缶を若者は寝ぼけた目で追いかけた。なにげなく

若者は空き缶にちがいがつけてそれを拾いあげてわざわざ「パリ」箱に捨てた。

きらんと缶と書かれたその「パリ」箱に若者は空き缶を捨てる。パリ箱に捨て箱を背に公園をあとにした。

都会の片隅の小さな店のなか店主はアンティークのカップでお茶を楽しんでいる。

「おまえもなかなか粹なサービスをするようになつたね」もと夢魅堂の店主が気に入りの椅子に優雅に座っている現在の店主にむかって言った。

「しかし、伝わっているかはわかりませんよ」

店主はそう言つとカップに口をつける。店主がお客様のためにしたサービス。それは人間たちの夢のなかに一人の夢をしのばせることだった。

「覚えていなくてもあれだけの愛でつづまれているとじつでは無視はできないだろ?」

もと店主はにこにこと満足そうに笑いながら言つた。そんなしわの深い顔を見ながら店主は言つ。

「そうですね」

店主自信も驚いてしまつほど優しく穏やかな声だつた。そして、なかばあきれたように言葉を足していく。

「サービスのつもりでしたが、これではサービスにはならない」大樹から支払われたものを見つめながら店主は言つた。元店主もそれを見て「ほう」と声をもらすと言つ。

「それではお釣りをわたしにいかないと・・・」

店主の手のなかにはあめ色に輝く琥珀があつた。きれいなその樹液の結晶は透きとおつていてそのなかに長い長いときを閉じこめている。店主の白い手袋をあめ色にそめている。

「まったくです

店主はそうかえすと琥珀をそつとテーブルにいた。琥珀はとき

の偉大さをたたえるように穏やかに輝いている。

店主はそつとカップを覗き込んで満足そうに微笑んだ。聞こえてくる聞こえぬ声に耳をかたむけながら。かれらとおなじよつにさきにあるだろう未来を思いながら。

大気はあいかわらず汚れている。大気だけじゃない、土壤も水も緑も絶滅にひんしている生き物たちだつてたくさんいる。

でもそんな暗いくらい苦しい世界にも星のように輝く光りはあってそれはまだまだ小さくて闇を吹きとばすことは無理だけど、きつといつか。

（リーフが見つめる希望の光りがまたひとつまたひとつとふえていくことを信じている・・・）

アースは穏やかな気持ちでささやいた。地上にいる世界の命あるものたちに。

うつくしいきれいな葉を広げ穏やかで自信に満ちたリーフは風に無数の葉を飛ばし人々の枕もとにそつとおくる。

彼らがおかしてしまつた灰色の過去と彼らがつぐないつくりゆく光りに満ちた未来を激励するように。彼らには届かないし見ることもできないだろうが、それでも彼らの心のなかにはのこると信じて。（信じているから・・・）

アースの言葉とリーフの言葉は風にのり人々の足をとめ、空を見あげさせた。彼らにははつきりと声としてどどいてはいないが彼らには心に感じるなにかがあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5314e/>

夢魅堂

2010年10月8日15時42分発行